



TITLE:

御大典時に於ける星空の美観

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 御大典時に於ける星空の美観. 天界 1928, 9(92): 2-6

ISSUE DATE:

1928-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161343>

RIGHT:

## 御大典時に於ける星空の美観

山 本 一 清

日月の輻輝やかしく、わが京都の皇宮に於いて今上陛下御一代の盛儀を  
舉げ給ふ此の十一月、八千萬の同胞が、海の内外をこぞつて聖壽萬歳を叫  
ぶ此の大慶賀の時期に當り、大宇宙も心あつてか、仰けば澄みわたる廣い  
空一ぱいに輝やく秋の星々の色も美しく、尙ほ、其れのみか、黃道一帯に  
は久しぶりに悉くの大小遊星が出揃つて、晝夜の天空を飾るのも目出たい。

。 。 。 。 。 。

聖上陛下が東京を御出發あつて京都行幸の儀を行はせ給ふ十一月六日の  
日より、賢所大前紫宸殿大嘗祭等の諸儀を頂點とし、大正天皇山陵親謁の  
儀の二十九日に至るまで、前後二十餘日の間の夜の空は、輝やかしくも亦  
美しい天象に満ちてゐる。此の頃、日が西に暮れると直ぐ、正しく天頂には  
神馬**ペガス**の整然たる正方形が現はれる。此の星座の永久に變らぬ形ち整  
のひは、紫宸殿前の清き御廣庭と、之れを圍む廻廊の美観を思はせる。つ  
いで其の北隣を見るに、不思議にもこゝには傳へ聞く夢幻の古國エチオピ  
アの王朝を象つた**セフェス**王と王妃**カシオペア**とが高く天空に君臨し、更に  
其の南と東とには美はしの王女**アンドロメ**姫と、王婿**ペルセ**の勇ましい凱  
旋の姿が赤白青の輝星たちによつて畫かれてゐる。赤道より少しく南寄り  
の空に大きく擴がつてゐる**くちら**星座も亦此のエチオピア王朝詩劇に縁の  
深いものの一つである。

。 。 。 。 。 。

北極星の向つて左、西北の空には「龍」の星座が全形を現はし、又、極南  
の天空には、右に「鶴」、左に「鳳凰」の二つの星座があつて、「南魚」の一  
等星**フォマルハウト**と共に天を飾つてゐる。更に、翻つて西の天を見るに、

天の河一ぱいに翼をひろけた「白鳥」の左右隣に、「昇る鷺」と「降る鷺」(琴星座の古名)とが舞つてゐる姿がある。



東を見るに、七美姫の舞ふ「プレヤデス」群星に導かれる「金牛」座と「馭者」星座とが既に地平から可なり高く昇つて來てゐるが、すぐ其の後からは、全天の王冠とも言ふべき「オリオン」の優れた形が登場して、廣々とした天空に著しい明るみを投げかける。此の「オリオン」の出現によつて甦つたやうに生々々輝やく天は、九時頃に、親しみ深い「双子」の星座を現はし、十時半には「小犬」のプロシオン星、又、十一時には「大犬」のシリウス星が現はれて、天界のはながた役者が皆出揃つた形となる。——皇宮に於いて挙げさせられる大嘗祭の御儀の時刻には、かうして、天空の最も華やかな星座の行進と共に、尊い諸儀式が行はれるのである。そして、此の御祭典の終る早朝午前の時には、東天に既に「北斗」と「獅子座」が高々輝やく、同時に、東の低い空には早くも「牧夫」の燃ゆる色のアークトゥル星と、「乙女」星座の純白なスピカ星とが顔を出してゐるこゝとなる。



恒星界の美象と共に、(前にも記した通り)、今秋の遊星界は珍しい賑はしさを呈する。

まづ、何よりも最も得意げに天空を牛耳るのは木星の巨大な光であらう。星座は「ひつじ座」であるから、毎日、日が暮れると、間もなく天頂に迫つて来る。此の木星は十月二十九日に對衝となつたばかりの時期であるから、光度は實にマイナス二等半、又、我が地球からは1億5000萬里(6億キロ)といふ近距離である。従つて、肉眼觀察以上に、若し望遠鏡で之を見るならば、視直徑四十三秒といふ大きい姿が、例の四個のガリレオ衛星に取りまかれて、蝕や掩蔽や經過などの現象を幾度も見せる珍景を楽しむのに、實に好時機である。



木星より少しく遅れて、火星が登場して来る。星座は「双子座」の夏至點に近いあたりであるから、時刻八時には既に東の地平線上にある。此の火星は年末十二月二十一日に太陽と對衝の位置に来るのであるから、御大典の十一月頃は刻々我が地球めがけて接近しつゝある最中であつて十一月十二日には留まり、接近速度は毎日二十萬里（毎秒時 23000 メートルづつ）となる。光輝はマイナス一等級であるから、シリウス星と餘り大差が無い。視直径も 16 秒に達してゐるから、火星表面の觀察に適當な時期に入つたわけである。

。 。 。 。 。 。

今年の十一月の天空に、見るべき遊星の一つは天王星である。但し、天王星は實は去る九月二十九日に既に對衝となつたのであつたのであつて、單に數量的に言ふならば、其の後漸次地球からは遠ざかりつゝあるものである。しかしながら、天王星の如き、元來遠方にある遊星は、其の對衝の時と會合の時とを比べて、大した距離の差を持たないのであつて、現に九月末には地球から 72500 萬里の距離であつたのに對し、十一月中頃は 73700 萬里といふのであるから、觀察の實際上、此の差は殆んど度外視して好い。そして、むしろ、衝を過ぎた此の十一月頃は、日没後、すぐ子午線に来るのであるから、一般社會の人々が天體を觀るためには、態々夜更けを待つ必要がなくて、好都合である。位置は「うを座」で、第 44 番星の西々南約 2 度（或は、春分點の東北東約 3 度）あたりを逆行してゐる。十二月十三日には留まり、其の後は順行して行く。此の附近には輝星が少ないため、普通の人ならば肉眼でも（勿論、双眼鏡でも）容易に見付け得るものである。但し、望遠鏡觀察には 200 倍以上を用るなければ興味は少ない。

。 。 。 。 。 。

金星が毎日の夕空に美しく輝やくのは此の秋の著しい見ものであつて、かつて記した通り、之れは實に二年半ぶりのことである。人類史五千年來の、「天界の女王」として諸民族に崇拜された此の明星の、美は言ふまでもない。

がリレオの發見以來此の星の形ちの變化は望遠鏡を持つ人々の大なる楽しみである。光輝はマイナス三等半であるから、シリウスや木星と雖も決して金星の敵でない。

御大典の期に西天に復歸して來た此の金星は、十一月より十二月へ、更に翌年初へこ、日々に愈々高く、益々強く輝やいて、來年の二月七日には太陽からの極大離角  $47^{\circ}$  となり、次いで三月中頃には極大光輝マイナス4等3に達する筈であるから、御大典と其の奉祝期間を通じて、見事を宵天を飾るに最もふさはしい星であるといはなければならない。



土星は「蛇遣ひ星座」にあつて、過去半年間の天界の呼びものであつた。今や年の暮れと共に其の姿を一時太陽の光芒中に消さんとしてゐる。しかしながら、御大典期の此の十一月は、未だ全く消え去るに至らないで、殊に月初の頃は、西の地平の開けた場所に望遠鏡を立て、幅廣い輪につまられた此の星のあいけうすがたを、小一時間も眺めることが出来る。光輝は0.7等級、全體の視直徑は35秒にも見えてゐる。月末から十二月一ぱいは全く見えないことになつて了う。



海王星は今「しゝ座」のレグルス星の東  $2^{\circ}$  半の所にあるから、十一月の夜半に東天へ現はれる。只、此の星は光輝が八等に近いので、肉眼觀察者を喜ばせないのは止むを得ないことであるが、とにかく、適當な星圖と望遠鏡を持つ人には、觀望は決して難事でない。



此の十一月十日頃から約二週間、水星が太陽より凡そ一時間早く東天から上るため、肉眼でも之れを見ることが出来る。かうした事は年に數度あることであるけれど、丁度之れが此の十一月に當つてゐるのは興味ある現象である。



十一月の「月」は、十二日に新月であるから、御神樂の儀や、大嘗祭の儀の頃、夜は闇空で、星のみが輝やくわけであるが、神宮や諸山陵親謁の頃からは宵天に月の光りが増し加はり、'全國諸地方の祝賀式に興を添えることとなる。それに、月末の二十七日は皆既月食が見えて、諸所の天文家を喜ばすであらう。

。 。 。 。 。 。

十一月と言へば誰でもすぐ連想する有名な流星群が二つある。一つは月の半ば頃、早曉の東天から飛ぶ「獅子座流星群」であるし、他の一つは月末二十三、四日頃、早曉に飛ぶ「アンドロメ座流星群」である。中にも、獅子座のものは年々此の期に空を賑はす最も著しいものであつて、丁度此の流星の出現期は、御大典諸儀式の最盛期に當つてゐる。知らず此の頃、かの關東に現はれた大火球の如きものが現はれて、人造の祝賀花火と共に美を競ふことが無いのか？

。 。 。 。 。 。

御大典を祝ふ天界も、誠に賑々しいと言ふべきである。

### 變光星アルゴルの觀測を勤む

本年中のアルゴルの極小觀測に好都合の時は

11月 2日22時1 5日18時9 20日30時 22日20時7 28日17時4

12月10日 1時5 15日22時4 18日19時1

(中央標準時) 22時は午後10時の事である

上記の豫報は本年十月十日十三日に京都天文台の小山、柴田、村上の三氏の測觀せるものより推算したるものである。

### 肉眼的變光星觀測用星圖の改訂

更にへびつかひ K, ろ L<sub>2</sub> 等を加へ圖を鮮明にしました。一組十五枚送料共 50 錢。

ミラ 木星の近く、目下減光中 光度 4.5 等 觀測されたい。